1893年シカゴ万国博における鳳凰殿の建設経緯について

THE FACTOR AND THE MOTIVATION OF THE HŌ-Ō-DEN'S CONSTRUCTION IN THE WORLD'S COLUMBIAN EXPOSITION IN CHICAGO, 1893

三島 雅博*
Masahiro MISHIMA

Japanese pavilion named HŌ-Ō-DEN (Phoenix Hall) in the exposition in Chicago, 1893, is important as the first Japanese traditional style building designed by a Japanese architect who studied Western architecture. Its form designed by Masamichi Kuru, however, is thought to have been influenced by the goals for participation of Japan in the Exposition and the participation of Ryuichi Kuki, Kakuzo Okakura and Kentarō Yanagitani with the Exposition office of Japan. Yanagitani had opinions regarding the Japanese pavilion and Kuki and Okakura had pride in Japanese art.

This paper reports the motivation for and the factors surrounding the HŌ-Ō-DEN's construction.

Keywords : HŌ-Ō-DEN, Masamichi Kuru, Kakuzo Okakura, Ryūichi Kuki, Exposition, Japanese-style

鳳凰殿, 久留正道, 岡倉天心, 九鬼隆一, 万国博, 伝統的日本建築

I. はじめに

明治26(1893)年, コロンブスの新大陸発見四百周年を記念して, 米国シカゴにおいて万国博が開催された。このコロンブス世界博覧会(以下「シカゴ博」と呼ぶ)は, 建築史的にはマッキム, ミード&ホワイト建築事務所による「ホワイトシティ」と呼ばれた古典主義様式の建築群がサリバンらのシカゴ派建築を終焉に導いたことや, 本稿でとりあげた日本館がフランク・ロイド・ライトへ影響を与えたことで知られている。

その日本館は平等院鳳凰堂にモデルを採ったことから「鳳凰殿」と名付けられたもので, 「藤原」「足利」「徳川」の各時代を表した三棟からなる建物であった。これは明治政府が万国博で建設した初めての本格的な日本館であることが評価されており, さらに建築家久留正道¹⁾の作品である事などが知られている。また, その建設には九鬼隆一や岡倉天心²⁾といった日本近代美術史・思想上の重要人物が関係していたことでも注目される。

また, 万国博のパビリオンという制約はあるが, 鳳凰殿は西洋建築を学んだ建築家設計による最も早い伝統的日本建築(以下, 単に「日本建築」と呼ぶ)の例としても注目すべき作品である。当時の日本の建築界の状況は, 明治20年に木子清敬による「日本建築術」の講義が工

科大学で始められ, 正規の教育を受けた建築家の目が日本建築に注がれ始めたばかりであり, その成果は日本建築では伊東忠太が木子と共に設計した平安神宮(明治28年竣工)や, 和洋折衷建築では長野宇平治設計の奈良県庁舎(同上)などに現れている。しかし伊東や長野と異なり, 久留は在学中, 木子に教えを受けておらず, 日本建築については独学であったと思われる。鳳凰殿も上記の建物よりも早い明治26年の竣工である。

これらの点から, 鳳凰殿について論及した研究は多く, 各々の視点から評価されている。

例えば, 古いものでは永山定富氏による研究があり, 鳳凰殿の「美観」とともに, その内部展示を「後の博覧会出品の模範を為したもの」と高く評価されている³⁾。

同様に, 吉田光邦氏も内部展示を重視されており, それが鳳凰殿建設の目的であったとされている⁴⁾。さらに同氏は, 鳳凰殿建設の背景に当時の万国博でのナショナリズムの昂揚があったことも指摘されている⁵⁾。

一方, 浜口隆一・山口廣両氏はその外観に目を向けられ, 鳳凰殿は日本建築の粋を示そうとしたものであったと推察されている⁶⁾。

また, 藤岡洋保・深谷康生両氏の近年の研究では, 戦前の万国博で建設された日本館の形式分けを行われてお

* 神戸大学大学院 大学院生

Graduate Student, Graduate School of Kobe Univ.

図—1 FRONT VIEW OF THE HŌ-Ō-DEN

[Kakuzo OKAKURA 『THE HŌ-Ō-DEN』 (K. OGAWA, 1893) より]

り、鳳凰殿を「出品物の陳列を主体としたもの」とはせず、「建物自体が展示物と考えられるもの」と位置づけられている⁷⁾。

しかし、管見では、鳳凰殿に焦点を絞った研究は見当たらず、これらは何れも万国博やその建築の通史について扱ったものである。そのためか、鳳凰殿について深く論及されておらず、建設目的のある一面だけが強調されているように思われ、その建設に到るまでの国内での経緯や動機、久留が設計を行った理由などは説明されていない。また、当時の久留の日本建築についての知識がどの程度であったかも、現在まで知られていない。

さらに、鳳凰殿建設の意味やその内容を理解することは、それに関係した人々の日本建築に対する意識や、久留正道という人物を通して、伊東忠太が登場する以前の日本人建築家の日本建築解釈の状況などを理解するための一助となるであろう。

本稿では、先に挙げた既往論文を踏まえながら、鳳凰殿建設の背景やその目的、動機を探り、久留がその設計を行うようになった理由や設計の基礎となる久留の日本建築についての知識を明らかにし、鳳凰殿建設の経緯を考察してゆく。

なお、本研究では当時の博覧会事務局がシカゴ博終了後に作成した報告書⁸⁾（以下単に『報告書』と呼ぶ）を基本とし、久留や岡倉が鳳凰殿について述べた文献、当時の新聞、官報などを主要な資料として用いた。

また、鳳凰殿の形態が決定されてゆくまでの経過については、稿を改めて明らかにする予定である。

II. シカゴ博参加への体制

政府は明治23年には、米国シカゴにおいて万国博が開催されるという情報を得ていた⁹⁾。以下に、参加体制

が整うまでの経過を示す¹⁰⁾。

明治23年

6月 米国より元東京駐在米国公使館書記官グース・タヴス・ガワードが来日し、政府の博覧会に関係する要人に接触、シカゴ博の宣伝を行い、同時に第三回内国勸業博覧会の為に上京していた全国の実業家達に同博への出品を勧誘する。

明治24年

2月 在ニューヨーク日本領事より、シカゴ博に関する米国大統領の宣告文を送付される。

この時点で日本政府の同博に対する参加の意志はほぼ決定していた。

3.3 米国政府よりシカゴ博参加への公式勧誘状を送付される。

これを受け衆議院貴族院共に同博への出品に対する予算追加案を提出している。

4月上旬 農商務大臣陸奥宗光は九鬼隆一に対し、シカゴ博に参加する為の事務組織を編成することを委嘱する。

5.11 農商務省告示を以て正式に同博への参加を公布。

6.5 勅令第五十二号をもって臨時博覧会事務局官制が発せられる。

シカゴ博参加の為に設けられた臨時博覧会事務局（以下「事務局」と呼ぶ）は、事務局総裁には特定の人物を定めず、その時々農商務大臣を充て、実質的な最高責任者である副総裁には九鬼隆一、評議員若干名、実際の業務にあたる事務官5名、書記嘱託若干名という構成¹¹⁾で、出品事務を開始していった。

この時の事務局組織で特筆されるのは、評議員制度で

ある。従来の万国博へ参加するための事務局は、何れも官吏だけで組織され、参加計画に民間人が直接関与することはなかった。しかし、この時に初めて評議員制度を設け、専門的な知識を持った人々を広く集めるため、人選は官界だけでなく民間からも行われた。臨時博覧会事務局官制によれば、その役目は事務局の業務に関する重要事項を審議調査するというものであったが、実質的には、各自の専門分野についての出品計画など、重要な指針を提出していたようである。

「総裁ハ（中略）二十四名ヲ評議員ニ内定シ同年（※）十月十六日ヨリ二十三日ニ至ル八日間之ヲ招集シ諮詢ニ答覆セシメタリ而シテ該評議員ハ別ニ建議書ヲ提出セリ其諮詢並ニ建議ノ事項等本邦参同ノ計画ニ関シテ最も重要ニシテ経費予算ヲ編成スルニ際シ頗ル参考ニ資セリ」（※→明治24年、筆者註）【報告書】第三章第六款事務局ノ方針」

「評議員中出品物ノ選擇及ヒ其他ノ経営ニ関シ予メ其分擔ヲ定メタリ」【同上】

また、鳳凰殿建設に目を転じれば、事務局の顔触れで注目されるのは、副総裁である宮中顧問官九鬼隆一、評議員では東京美術学校々長岡倉天心、事務局では帝国博物館理事山高信離である。

九鬼が副総裁に選ばれた理由は、直接的には事務局の編成を委嘱されたことによるが、本質的には以前から博覧会事業に関係していたことや特に前駐米特命全権公使という経歴が評価されたものと推測される¹²⁾。また、九鬼は明治10年代より、「龍池会」や「鑑画会」といった日本美術の鑑賞、発展を目的とした組織に属しており、そこでフェノロサと接触し、啓発を受け、日本美術に対する自信をより深めていた。さらに、九鬼は美術行政を担う官僚であったため、明治10年代に洋画に対して圧力をかけた一人でもあった。このように、九鬼は日本美術の保護主義的な色彩を感じさせる人物であった。

岡倉が評議員に選ばれた理由は、東京美術学校々長という地位が挙げられるが¹³⁾、他に九鬼との関係が重要である。なぜなら、二人はシカゴ博の事業に参加する以前から、その職務を通じて密接な関係を築いており¹⁴⁾、さらに当時は帝国博物館において、九鬼と岡倉は総長と理事の関係にあった。また、帝国博物館は明治24年9月頃より政府出品の建築物（後の鳳凰殿）の調査を行っており、岡倉は評議員会に参加する以前から博覧会事業に関係していたと思われる¹⁵⁾。さらに岡倉が日本美術の近代化¹⁶⁾を行っていたことも、九鬼の考慮に入っていたことであろう。岡倉は明治10年代はフェノロサと共に、そして明治20年代に入ってから自らが中心となって、狩野芳崖や橋本雅邦らの画家らとともに日本画の近代化を推進しつつあり、自らが校長である東京美術学校では、西洋美術やその教育方法を排し、日本美術に基本を置いた教育を展開していた¹⁷⁾。岡倉の事務局における比重は、美術出品や鳳凰殿などの事業の進展とともに高まって

いったと思われるが、それは岡倉が評議員だけでなく、後に述べる鑑査官やさらには事務局にまで任命されていたことから伺える¹⁸⁾。

一方、山高は当時、帝国博物館理事であった点が注目されるが、それ以上に、明治造宮皇居の装飾意匠を担当した人物¹⁹⁾であり、建築的知識も相当あったと思われる。事務局設立当初、事務局に任命されていたのは、農商務省の官吏以外には、山高と手島精一だけであり、九鬼の山高に対する信頼の厚さが伺われる。山高も岡倉同様、鑑査官に任命されている²⁰⁾。

この他、東京工業学校々長であり、事務局を代表して米国の主催者側と重要な交渉を行った事務局手島精一も明治11年、当時文部大書記官であった九鬼の随員としてパリ万国博へ派遣されており、九鬼との関係はシカゴ博以前から存在していた。

このように、九鬼は、事務局に自らの関係者を多く集めており、特に事務局には、農商務省の官吏以外は山高、手島、岡倉の三名だけであり、自らの方針を実行しやすい状況を作り出していたといえよう。

Ⅲ. シカゴ博参加の目的

日本政府のシカゴ博参加の目的は『報告書』や当時の官報によると、吉見俊哉氏が指摘されているように²¹⁾、国威の発揚及び日本品の輸出拡大という二点にあった。

「閣龍世界博覧会ニ参同シテ我國産ノ百貨ヲ出陳ノ要ハ主トシテ我國體ヲ宇内列国ノ間ニ表示シ所産ノ百貨ヲ周知セシメ以テ我國威ヲ発揚スルト同時ニ将来ニ於ケル通商貿易ヲ拡張セント欲スルニ外ナラス」【報告書】第三章第六款事務局ノ方針」

これらの目的を達成する方法としては、公募による普通商品や美術品、美術工芸品などの一般出品の他に、さらに政府出品として、過去様式に基づいた日本建築の建設、美術品及び美術工芸品の展示が考えられた。

「政府出品ノ必要起リ或ハ往路ノ築造物ヲ示シテ優美ナル建築術ノ進歩ヲ視シ或ハ今古ノ美術品ヲ出シテ高尚ナル技術ノ特能ヲ知ラシメ以テ我國光ヲ発揚シ以テ我貿易ヲ拡張スルノ基因タラシメントスル」【臨時博覧会事務局報告第一回・予算】『官報』（M26.6.6）」

この政府出品は鳳凰殿およびその内部での展示を指しているが、これについては後で詳しく述べる。

これらの展示及び建築に関する業務は、臨時博覧会事務局分課規定によれば、出品課が担当する業務であったが、現実の出品計画の方針を立てていったのは、先に述べたように、評議員であったと考えられる。

まず普通商品などの展示であるが、出品物が優れておればそのまま日本品輸出の増加を計ることができ、また同時に国威発揚も可能であった。このことをより効果的に行う為に官民から人材を集めること、これが評議員制度を導入した理由の一つであった。

次に美術品及び美術工芸品の一般出品であるが、これに関して、事務局は並々ならぬ意欲を示している。ここで注目したいのは、岡倉が当初から評議員に任命されていたことである。評議員が内定した明治24年10月に開かれた第一回の評議員会で既に「美術品奨励法」が諮問されており、特に反対意見がなかったため「政府」に一任されている²²⁾。ここで云う「政府」とは、評議員を除いた事務局のことであろう。この諮問を受けたものと考えられるが、美術品の精選を期して、明治24年12月23日に臨時博覧会事務局告示第五号鑑査規則を發布し、翌25年3月10日勅令第二十三号を以て臨時博覧会事務局官制に第十二條を追加して鑑査官及び鑑査制度を規定している。

また、シカゴ博以前の万国博では、美術品の分類規準は西洋の概念によっていたので、日本の伝統的な美術品は西洋の「純粋芸術」という枠に収まらず、美術部門ではなく工芸部門に入れられていた。評議員会は、このことを日本美術の名誉を傷つけるだけでなく、その発達をも妨げるものであると判断し、シカゴ博において日本から出品する美術品が西洋美術と同等に扱われ、欧米の美術界で名声を得ることを望んだ。これより、明治24年末にシカゴへ出発した手島精一が主催者側と行う交渉の最重要項目の一つに、日本から出品する美術品の分類変更請求を入れ、その結果はば無条件で受け入れられた。

このような日本美術に対する誇りが評議員会において明確に現れた理由は、九鬼や岡倉らの日本美術に対する自負、それに加え鑑査制度により、日本の美術出品に強い自信を持ったことにあると考えられる。事実、日本美術品の分類変更を主催者側と交渉するように提案した評議員が岡倉であったことは、最近の研究で確認されている²³⁾。さらに、これらのことが評議員会で受け入れられた背景には、岡倉や九鬼がフェノロサらと明治10年代から始めていた日本美術の再評価が世間的に認められていたことがあるだろう。

ここで注目したいのは、美術品や美術工芸品の何れの選定においても、西洋的な作品を対象としていない点である。洋画家の団体であった明治美術会の会員は、事務局特に九鬼に対して反発し、明治25年7月頃に出品願いを取り消している。その理由は、当時の新聞によれば、「彼等が信ずる所と当路者の意見と平生より相合はざるに起因せるものゝ如し」〔「洋風画工が出品を見合せたる理由」『読売新聞』(M25.7.4)〕とし、さらに、九鬼が西洋美術を排斥していることにあるとしている。もっとも九鬼は翌日の同新聞で、洋画を排斥したことはないと取消記事を出している。事実、事務局は西洋美術を排斥することを明確に記した文章を、公示してはいない。しかし、出品希望者に対して出された応募要項類から、事務局が西洋的な作品の出品を望んでいなかったことを読

み取ることが出来る。

明治24年10月2日に臨時博覧会事務局告示第一号として出品応募要旨が出されたが、さらに事務局はこの告示を補うために『臨時博覧会事務局告示ノ要旨』と題した印刷物を配付した²⁴⁾。この中で、美術品については国威発揚を期待して、以下のように記している。

「各自カ特得ノ妙ヲ以テ其技倆ヲ盡シ各自カ本然ノ靈妙ヲ顯ハシハ以テ本邦固有ノ風致ヲ顯ハシ清艶ナル文華ヲ示シ他ノ尊敬心ヲ發起セシメハ以テ各国ノ諸大家ト輸贏ヲ試ミ勝ヲ一大公会ニ占斷シテ公衆ノ敬愛心ヲ惹起シ各自ノ美名ヲ千歳ノ後ニ遺スヘシ」(傍点筆者)〔『報告書』第三章第六款事務局ノ方針〕

また、美術工芸品については国威発揚とともに、普通商品の場合と同様に輸出拡大を期待して、以下のように記している。

「新古ヲ折衷シ優雅ナル我本色々ヲ顯ハセル精良品ヲ製出シ各自ノ名誉ヲ顯揚シ他ノ愛敬心ヲ發起セシメ彼ノ嗜好ヲ惹起シ時ノ流行ヲ支配セシムルノ工夫ナカルヘカラス」(傍点筆者)〔同上〕

さらに翌25年4月1日には、「出品者心得」を出しているが、この時には、既に主催者側に日本から出品する美術品の分類変更を認めさせていたため²⁵⁾、芸術性の高い美術工芸品を美術品と同等に扱っている。

「美術品并ニ高等ノ美術工芸品ハ我國ノ文華ヲ開示シ各自ノ技倆ヲ顯シ名誉ヲ發揮スルヲ旨トシ各自特有ノ標準ヲ有シ一般商品ト同視スヘカラサルナリ」〔「コロンブス世界博覧会録事、コロンブス世界博覧会出品者心得・通則」『官報』(M26.4.1)〕

このように、いずれにもその出品目的を達するのに、日本の固有性を表現することを求めている。

このことから、事務局の美術関係の出品姿勢が、九鬼や岡倉の望む方向へと向かっていた事が分かる。

IV. 鳳凰殿建設の目的

IV-1 鳳凰殿建設の目的

『報告書』では、日本の実情が外国でよく知られておらず、中国の一部を以て日本の状況を擬せられているような状態であるとしている²⁶⁾。

「我國情ヲ知ラサルモノハ動モスレハ輒チ我ヲ目スルニ晩開幼穉ノ国ヲ以テシ其太甚シキニ至リテハ支那ノ一部ヲ以テ我ニ擬スル者アルニ至ル豈ニ慨嘆ニ勝ユヘケンヤ」〔『報告書』第四章第二十款鳳凰殿〕

また、吉田光邦氏が指摘されているように²⁷⁾、当時の万国博では、各国がナショナリズムの昂まりを反映してその国独自の様式で自国館を建設していた。このことを事務局は認識しており、以下のように述べている。

「何レノ邦国ニ在リテモ博覧会ニ參同スルコトニ必ラス自國固有ノ堂宇家屋ヲ建設シ且ツ施スニ其習慣風俗ノ一斑ヲ示スニ足ルヘキ裝飾ヲ以テ大ニ自國ノ威嚴ヲ顯揚セン事ヲ勉メサ

ルハナシ」[同上]

また、このことは、明治6(1873)年のウィーン万国博や同9(1876)年のフィラデルフィア万国博で日本建築を建設していることから²⁸⁾、日本政府も以前から分かっていたのであろう。さらに独立した日本館を建てないまでも、明治11(1878)年及び同22(1889)年のパリ万国博などでは、仏国側が提供した展示建物の日本部に日本風の装飾を施していた。しかし、事務局はこれらの建物や装飾では国威を発揚するには充分でないと考えていた。

「而シテ我帝国ハ従前ノ博覧会ニ向テ未タ曾テ前述ノ如キ家屋ヲ建築セサリシ洵ニ遺憾トスル所ナリ」[同上]

さらに、シカゴ博は従来の万国博よりも規模も大きく、参加国数も多かった。また、米国は日本の輸出品の最大消費国であった²⁹⁾。そこで万国博が開催されるのであるから、事務局はシカゴ博に参加するのに、これまで以上の力を入れるだけの意味は充分にあり、それを日本の真の姿を示し、米国民に日本をアピールする絶好の機会と捉えた。そのためには、優れた建物を建設する、それも近年の建築様式によるよりは、昔の様式によるほうが効果が高いとしている。

「壯観雅麗ノ家屋ヲ建築シ以テ東洋悠久ノ一大帝國タル実相ヲ世界ニ発表スルニ於テ洵ニ是レ千載一遇ノ機運タルナリ然ルニ此ノ目的ヲ達センハ軌近ノ建築式ニ依ランヨリハ寧ロ昔時ノ様式ヲ取ルヲ以テ優レリトス」[同上]

古建築の様式に則ることの意味は、後に述べる建築美の表現という点の他にもあった。先の引用文に「東洋悠久ノ一大帝國タル実相ヲ世界ニ発表スル」という一節があり、また、同書同款には「國ヲ建ツルノ久シキヲ公示スヘキハ最モ必要ナルノミナラス」といった一節があるなど、事務局は日本の歴史の長さを表現することに強い意欲を示している。そのために、日本館のモデルに古建築を用いて、日本が単に歴史的な長さを持つだけでなく、昔から高度な文化を持っていたことをも同時に示そうとしたのである。事務局は、日本建築が高度に発達したのは天平に始まり、「藤原足利」二氏の時代が頂点であるとしているが³⁰⁾、このことを外国人に知らせることにより、日本に対して尊敬の念を抱かせることが出来、国威を発揚することが可能になると考えていた。

「若シ外人ノ我國情ニ通セサルモノヲシテ美術工芸ノ進歩ノ千二百有余年前業ニ已ニ此ノ如ク最大高度ニ達シタルヲ知ラシメハ彼ハ必ラス其我ヲ蔑スル所ノモノ翻シテ我ヲ敬重スルノ念ヲ生スルニ至ラン果シテ然ラハ其國權ヲ伸張シ國威ヲ發揚スルニ於テ重要ノ関緊ヲ有センハアラス」[同上]

すなわち、日本が持つ歴史の時間的長さ及び文化的長さを同時に表現するための媒体として、鳳凰殿が用いられたのである。

このように『報告書』には、鳳凰殿について国威発揚

という目的が強調されていたが、実際には、目的はそれだけではなかった。

「本邦ノ家屋ヲ建設シ一面ハ以テ国民ノ本位ヲ明ニシ一面ハ以テ製作品本来ノ面目ト其實用トヲ知ラシムルヲ緊要ノ施設ナリトス(略)鳳凰殿ハ(略)貴族常住ノ室内装飾ヲ施シ之ニ我國独特ノ美術品ヲ配置シ室内装置ノ位置及用法ヲ知ラシメ以テ建築ノ壯麗美術ノ優美ヲ示シ我國光ヲ發揚スルト同時ニ貿易擴張ノ道ヲ開カントス」[『臨時博覧会事務局報告第一回・政府出品』『官報』(M26.6.7)]

すなわち、輸出拡大も、その建設から期待されていた。またこれより、事務局にとって鳳凰殿建設の具体的な目的は、以下の三点にあったこともわかる。

- (1) 建築美の表現
- (2) 美術品の陳列所
- (3) 美術工芸品の使用方法の教示

IV-2 柳谷謙太郎の提言

先に挙げた藤岡・深谷両氏の研究³¹⁾によれば、万国博で日本館と呼べるものは、明治6年のウィーン万国博や同9年のフィラデルフィア万国博以後、シカゴ博まで建設されていない。すなわち、ほぼ前例がない状況から鳳凰殿の建設が決定したことになる。しかし、その前回の明治22年のパリ万国博では、日本館は建設されていないが、それに近い形態の日本の陳列場が設けられており、この時の報告書でそのそれに対する評価が鳳凰殿の建設を促進したと考えられる。

この時の日本の陳列場³²⁾は、仏国側の建てた建物に設けられたものであって、日本の出品場であることを示すように演出されていた。外部を装飾的に大名屋敷や城壁に似せ、入口も城や寺院、神社の門の形態を用いていた。しかし、これは言わばまがいものであり、この時の報告書は以下のように評している。

「出品区ノ造作装飾等ハ自ラ歐洲風ヲ学ハサルヲ以テ非ナルモノニ巨額ノ費用ヲ要シ而シテ其効益如何ニト顧ミレハ只歐洲列國ノ間ニ介立スルニ止マリテ其状月夜衆星ノ觀ナキヲ保セス」[『外国博覧会へ参同ニ付テノ意見』『仏国巴里万国大博覧会報告書』(明治23年)]

すなわち、装飾などを西洋的なものにするつもりはなく、日本的ながらも本物でないものに巨費を投じており、その効果は殆ど無いと、厳しい評価を下している。

この日本陳列場の設計者は、この時の報告書には「日本部建築師 仏国人 シャルル コーチュ」とあるが、

図-2 明治23(1889)年パリ万国博日本列品場

【『仏国巴里万国大博覧会報告書』(明治23年)より】

日本的な建築装飾まで設計したとは考えられない。おそらく、入口に取りつけられた額縁などの装飾を担当していた起立工商会社³³⁾が、日本的な建築要素を装飾として設計加工したものを壁に貼り付け、建物を演出していたのではないかと考えられるが、推測の域を出ない。逆に、その設計者の無名性がこの造形を表現しているといえるであろう。すなわち、名のある人物が設計もしくは指導したのではなく、またこの時の博覧会事務局が革新性や熟慮した日本性などを盛り込んだものでもなく、単に慣例的な方法に基づいて日本風の演出を意図した造形であったということである。この時の報告書は、前の文に続けて、将来の万国博での日本館の提言を行っている。

「将来外国博覧会ニ参同スルトキハ寧ろ純然タル日本風ノ家屋ヲ建設シ以テ我出品ノ陳列本館ト為スヘシ」

ここで初めて、日本館を単なる日本を感じさせるような演出を施した建築ではなく、本格的な日本建築で建てようという意見が現れたことになる。

この報告書の執筆者は、当時農商務省書記官であった柳谷謙太郎で、この時が初めての万国博事業への参加であったが、柳谷は明治初めより外務省勤務や米国派遣、サンフランシスコ領事などを歴任することによって海外生活が長く³⁴⁾、国際的な視野を持った人物であったと考えられる。また、柳谷はこの時バリーに派遣されており、各国が自国館を建設していることの効果を、強く実感したのであろう。これが、柳谷の発想の背景となっていたであろうことは、想像に難くない。

IV-3 建築美の表現

建築美を表現することは、万国博に建設するパビリオンである以上、シカゴ博以前の日本館でも考えられたことであろう。しかし先に述べたように、事務局は以前の日本館では国威発揚という点で充分ではないとしていた。その結果、日本の万国博参加史上初めて、名作と呼ばれる日本の古建築をモデルとして日本館を建設するという方法が採用された。

ところが、その方法も最初から考えられていたわけではなく、鳳凰堂をモデルとして日本館を建設することが決定する前に、単に「藤原」「足利」「徳川」の各時代の

図一3 足利氏時代の建物の方向から見た鳳凰殿
[『Das Columbische Weltausstellungs-Album』 (Chicago, Randm McNally, 1893) より]

建築様式を表現しようとしただけの計画が考えられていた。それを見た久留正道は以下のように述べている。

「マルデ刺身ノ脇ニ以テ往ツテ館テモ附ケルヤウナ工合デ誠ニ面白クナイ其レニハ九鬼君モ色々考ヘラレタルガ詰ル所古ヘノ形ヲ取ツタラ宜カラウト云フノデ (略)」[久留正道「米國博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付テ」『工学会誌』(M26.10)]

その計画では建築美を表現することはかなわず、九鬼隆一の判断で実在の古建築をモデルとすることに決まり、選ばれたのが平等院鳳凰堂であった。

さらに久留は鳳凰殿を設計する段階において、鳳凰堂の再現を目指したのではなく、三時代を同時に表現するために、様々な工夫を施している。

「諸方カラ画図ヲ集メテ東京デモ西京デモ画図ヲ集メテ其内ノ善イモノヲ折衷シテ全軀ノ図面ヲトメマシタ」

「別々ニ建テルナラ兎モ角三時代ノ物ヲツニスルノデアルカラ多少ノ違ナケレバナラス、唯ダ戸ニ持テ往ツテ横ニ條ノアルモノヲ十字スル位ナモノデ其位ノ事ハ仕方ガナイ、其位ノ無理ハシナケレバナラスト云ツテ漸ク三時代ノ家ヲト纏メニシタノデス」[同上]

各時代をそのまま表現したのではまとまりがつかず、その結果、配置などの全体的な構成を鳳凰堂を参考として設計したことを、久留は落成式の式詞で述べている。

「其建築ノ規矩固ヨリ三時代ニ依リテ異ナリト雖モ今之ヲ宇治ノ鳳凰堂ニ擬シテ一様式ニ配置シ名ケテ鳳凰殿ト称ス」
[『報告書』第四章第二十款鳳凰殿]

各時代をそのままに再現しなかった点は、岡倉や山高信離から反論があったようであるが³⁵⁾、久留はあえて時代考証の確かさよりも、建築表現を重視した。但し、藤岡・深谷両氏が「積極的に折衷を試みながら新しい和風建築をつくってみせるという発想」³⁶⁾は、この時点ではまだ見られず、三時代の建物をまとめる為に仕方なくというどちらかといえば消極的な態度である。

また、建築美を表現しようとする意志は、敷地の選択にも現れている。事務局が鳳凰殿の敷地として請求したのは、ジャクソン・パーク内のウーデッド・アイランドであった。事務局がそこを選んだ理由として、其地形が日本の本州に似て樹木が繁っていることを挙げており³⁷⁾、鳳凰殿が日本特有の形や気高さを発揮するには、敷地がそれに相応しいものである必要があり、ウーデッド・アイランド以外に適当な場所は見当たらないとしている³⁸⁾。そこが会場内の一等地であったこと、主催者側がそこを独自に計画していたこと、さらに事務局が鳳凰殿となる建物を博覧会終了後シカゴ市に寄贈する計画であったことなどが重なり、敷地の獲得交渉は難航した。しかし、結果としては、低い建物であることを条件に日本館を建設する承諾を得た³⁹⁾。

この敷地獲得に関して特筆されるのは、建物の目的や性質に合わせて、敷地を選択している点である。シカゴ

博以前には、先のパリ万国博で柳谷謙太郎が報告しているように、日本は、途上国のように扱われることを嫌い、欧米の先進国と同じ区域に敷地を求めていた。

「従来我国ニ於テ外国博覧会ニ参同シタルノ状ヲ見ルニ皆其出品陳列所ハ半開国ノ区域ニ混入スルヲ嫌ヒ務メテ欧米各国ト並設セン事ヲ欲シタル者ノ如シ」〔「外国博覧会へ参同ニ付テノ意見」前掲「仏国巴里大博覧会報告書」〕

このことは、当時の日本が開国以来目指していた欧化政策と同質のものであり、日本を欧米と同様の先進国として認めさせたい、もしくは認めてもらいたいという願望の現れであると考えられる。

しかし、シカゴ博の段階では、ウーデッド・アイランドという一等地を要求している点から、欧米と同等に扱われることを望む態度が感じられはするが、それだけではなく、建物の目的や地形などに、敷地選択の理由を求めており、日本自らの姿勢を持つに至った点が評価できる。すなわち、環境を整えることによって、建物の美しさをより高度に発揮し、そのことにより、先進国としての高度な文化を持っていることを表現しようとしている点が、シカゴ博以前の段階からの進歩と言えよう。

IV-4 美術品及美術工芸品の陳列

次に、美術品の陳列所としての目的であるが、美術工芸品の使用方法の教示という目的と密接に絡んでおり、鳳凰殿の建設目的を考える上で、重要な問題である。

鳳凰殿内部での美術品陳列は、それまでに見られない極めて主題性の強いものであった。以前の万国博での日本館で陳列された美術品は、その時点での日本に於ける美術の現況を表明するものであり、普通商品などの一般

陳列品とその目的において大きく異なるものではなかった。しかし、鳳凰殿での展示はそれらとは異なり、過去の日本美術を再現したもので、各時代を表現した建物の内部に、その時代を再現した内装を施し、そこにその時代の美術品を陳列するというもので、これに続く万国博での日本の美術史展示の先駆けとなったものである。日本美術史の展示は、日本美術が持つ芸術の高さを示すとともに、鳳凰殿のモデルに古建築を選んだこととによって得られる歴史的長さや文化的長さの表現を、より効果的に行うことにも繋がるものであった。

さらに、美術品を陳列すると同時に美術工芸品の使用方法を示すことにより、展示がより高度なものとなった。それは、鳳凰殿の内部に各時代に対応した美術工芸品のあるべき位置に配置して、使用されている状態を再現し、それらを観客が見ることによって、実際の使用方法を理解させようというものであった。そのことにより、美術館に展示しては表すことの出来ない日本美術独自の性質を示すことができたのである。

先に述べたように、シカゴ博では日本美術品の分類変更成功していた。しかし、これはその名誉を高めることになっても、「用」を持つという日本美術独自の性質を示すことにはならない。そこで、このような展示を行うことで、この性質を示すことが出来たのである。

また、シカゴ博の時点迄も、日本の美術品はそれなりに海外で評価されてはいた。しかし、それらはあくまで単品として評価されているのであり、本来ならばそれらが集合して、かつ使用された状態で総合的に評価されるべきものであった。そこで、シカゴ博で鳳凰殿を建設す

図一4 鳳凰殿とウーデッド・アイランド

[[Official Views of the World's Columbian Exposition] (World's Columbian Exposition, 1893) より]

図—5 左翼棟「藤原時代」建物内部
[Kakudzo OKAKURA 『THE HŌ-Ō-DEN』 (K. OGA-
WA, 1893) より]

図—7 中央棟「徳川時代」建物内部
[Kakudzo OKAKURA 『THE HŌ-Ō-DEN』 (K. OGA-
WA, 1893) より]

図—6 右翼棟「足利時代」建物内部
[Kakudzo OKAKURA 『THE HŌ-Ō-DEN』 (K. OGA-
WA, 1893) より]

ることにより、その内部で美術品や美術工芸品の本来の姿を再現し、それらによって作り出される芸術的な空間を表現する機会を得たのである。

「従来本邦製作品ノ海外ニ於テ称賛ヲ博シタルモノ総テ一技術一物品トシテ賛美セラレタルニ過キス全體ノ優美ナル思想ヲ啓発シ人生ニ於ケル実用ヲ開示スヘキマテニ至リテハ絶テ其機会ヲ得タルコトナシ（略）本邦ノ家屋ヲ建設シー面ハ以テ国民ノ本位ヲ明ニシ一面ハ以テ製作品本来ノ面目ト其实用トヲ知ラシムルヲ緊要ノ施設ナリトス」[『臨時博覧会事務局報告第一回・政府出品』『官報』（M26.6.7）]

このように、美術工芸品の使用法の教示を展示に加える事によって、日本美術本来の姿を表すことができるようになり、その展示内容も濃いものとなっていった。

吉田光邦氏は、このような展示内容に注目され、鳳凰殿は、「インテリアとしての美術品」としての性格を紹介するために建設されたとされている⁴⁰⁾。

しかし、これらの内容は後に鳳凰殿となる建物の出品が決定した後に考え出されたものであった。当時の新聞が、鳳凰殿出品の顛末を関係者から取材しており、その中に以下の文章がある。

「之れ（※）を出品するに決したる上は仏堂を其儘に出すも興なし此の堂の左右に羽翼の堂あるを利用し我国美術の沿革を知らしむるこそ然るべし」（※→鳳凰殿、筆者註）[『鳳凰堂の出品に就て』『読売新聞』（M25.9.26）]

これより、鳳凰殿内部の展示内容が、その建設の契機となったものではなかったことがうかがえる。

また、美術工芸品の使用方法の教示は、国会での要請を受けて、その展示内容に途中から加えられたものであった。明治24年末に開かれた衆議院予算委員会において、シカゴ博への参加費用が審議され、後に鳳凰殿となる建物の建設目的が検討された。その結果、委員会は事務局が重視する国威発揚を建設目的の第二番目とし、委員会が考えるところの博覧会参加目的である輸出拡大への貢献が、建設目的の第一番目となるように要請した。これは、鳳凰殿内部の日本美術史を表現した展示を問題視した結果出されたもので、明治24年12月4日衆議院本会議において予算委員会を代表して、小間肅が以下のよう報告している。

「先づ販路ノ拡張ニナルコトヲ第一ニシテ、美術工芸ヲ示スト云フコトハ第二ニ廻ハスト云フコトヲ、政府ニ要求スルコトヲ委員デ決シマシタ」[『衆議院第二回通常会議事速記録第五号』『官報号外』（M24.12.5）]

また、小間は輸出拡大に貢献するような展示内容を、以下のように具体的に述べている。

「今ノ日本カラ外国ニ輸出スル品物ヲシテ、此品物ハ日本ニハ斯ウ云フコトニ用ヒテアルカラ、之ハ斯ウ云フコトニ用ヒレバ大ニ都合ガ宜イカラ、之ハ必ズ買ハナケレバナラヌト云フ都合ニナル様ニ、人ノ耳目ヲ惹起スコトニシタイ」[同上]

これらは翌日の国会で討議され、賛否両論出て、結局結論が出ないまま、参加費用だけが採決された。

しかし事務局としては、国会で結論が出なかったとはいえ、この問題を無視することは出来ず、輸出の拡大に貢献するようなものを鳳凰殿の内容に加えることとし、それが美術工芸品の使用方法の教示という形を以て現れた⁴¹⁾。先の新聞記事には、何故美術工芸品の使用法を示

さねばならなかったかの理由が記されている。

「従来泰西人は好むで我國の器具を購求むるも多く之を用ゐるの法を知らず（略）我邦人として一見捧腹せしむるの奇観を呈し自然用法の知れざるより其需要も亦広まらざる弊ありしが今度は鳳凰堂出品の¹¹一目的として諸器具の用法とも知らしめんと置物其他一切の裝飾品を適當の場所に備へ付け一見実用の次第を会得せしむるの経画なり」〔前掲「鳳凰堂の出品に就て」〕

これは、まさしく小間の提案そのものであり、衆議院予算委員会の要請を受けた展示内容であった。

このように、美術工芸品の使用方法の教示は、美術出品を充実させるために内部展示に盛り込まれたのではなく、本来は日本品の輸出増加に貢献するものとして、そこに盛り込まれたものであった。

また、前回のパリ万国博の報告書において、将来の万国博で「純然タル日本風ノ家屋」による日本館を提言している柳谷も、貿易上の効果を期待していた。そのことを提言した先の引用文の前置きとして、万国博に参加する目的及びそれを達成する方法について述べている。

「凡ソ外国博覧会ニ参同スル所以モノハ其目的一ナラサルヘシト雖モ就中最緊要ナル者ハ我國ノ名誉ヲ博シ将来ノ貿易ヲ促スニアリ此目的ヲ達セント欲セハ博覧会場ニ於テ多クノ観客ヲ招キ広ク購買者ヲ求ムルノ方法ヲ講セサルヘカラス」〔「外国博覧会へ参同ニ付テノ意見」柳谷前掲「仏国巴里大博覧会報告書」〕

また、日本建築を建てたことにより、人の注目することとなり、今までのように欧州列国の間に建てられていた時よりも人を集めることができ、購買者を増やすことができるであろうとしている。

「然ルトキハ却テ人ノ注目スル所トナリ其効用列国間ニ介スルニ倍蓰シ観客ヲ誘ヒ購買者ヲ求ムル事必ス一層ノ便宜ヲ加フヘシ」〔同上〕

すなわち、柳谷が日本建築を建てることを提言したのは、万国博における集客、さらにはそれからもたらされる貿易上の効果を考へてのことであった。

しかし、鳳凰殿の内部は、あくまで美術展示であり、その内容は岡倉や丸鬼が決定していったと考えられる。事実、その内部装飾は東京美術学校が制作し、さらにそこでの展示物は帝国博物館が選んだものが出品されていた。これにより、同校々長であり、同博物館理事であった岡倉が特に重要な役割を果たしていたと考えられる。

日本美術品の輸出拡大については、明治10年代末に、フェノロサや岡倉、そしてシカゴ博で評議員であった河瀬秀治らが指摘、提言していたことであった⁴²⁾。これらは、東京美術学校の開校が決定する以前の提言であり、同校々長岡倉は、このことが頭にあり、シカゴ博を日本美術品の輸出を計る契機と考えたのではないか。国会から鳳凰殿に輸出拡大に効果があるよう求められた時、美術品の輸出を考え、それを美術品の展示に結びつけたと言えるのではないだろうか。

V. 鳳凰殿の設計者について

鳳凰殿の設計者が久留正道であることは、現在知られているが、『報告書』によれば、その設計は東京美術学校に依頼されたものであった。

「全体ノ設計ヲ東京美術学校ニ托セリ於是同校ハ直ニ其設計ニ着手シ大家名流各々カラ畫シテ之ヲ分擔セリ」〔「報告書」第四章第二十款鳳凰殿〕

また、同書では、久留は「建築工事監督囑託」として挙げられているだけである。しかし、同校がその設計を担当した関係からか、岡倉は英語による鳳凰殿の解説書『THE HŌ-Ō-DEN (PHOENIX HALL)』⁴³⁾（以下『英語解説書』と呼ぶ）の執筆を行っており、その中で以下のように記している。

“The work of interior decoration was undertaken by the Tokyo Art Academy⁴⁴⁾, and the furniture and art works in the exhibition are selected by the Imperial Museum. (略) The principal design of the buildings was made by Masamichi Kuru, the Government Architect of Japan, and the builders are Okura & Co., who have sent a number of their workmen to Chicago.”

訳⁴⁵⁾「その内部装飾は東京美術学校が担当し、展示の調度と美術品は帝国博物館が選んだ。(略) 建物の主要なデザインは日本政府の建築士である久留正道が行い、施工者は大倉組(※)で、多くの職人をシカゴへ派遣した。」

(※→日本土木会社のこと、筆者註)

これより、鳳凰殿の設計者は久留であったことがわかる。

当時、久留は文部省の技師であると同時に、東京美術学校から「建築装飾術」の講義を委嘱されており⁴⁶⁾、その関係から、鳳凰殿の設計を依頼されたのであろう⁴⁷⁾。

しかし、『報告書』の先の引用文にあるように、同校において久留をはじめ、各人が分担してその設計を行っていた。ここで問題となるのは、久留がどの程度その設計を行ったかということである。

『報告書』では、橋本雅邦が同校の教授陣が鳳凰殿内部の絵画や彫刻を担当した⁴⁸⁾ことを述べた後、設計にも貢献したと述べている。

「此等ノ画伯ハ咸其得意トスル所ニ依リカラ丹青ノ業ニ竭シタルノミナラス大體ノ設計監督ニ於イテモ興テ大ニ功アリトス」〔「報告書」第四章第二十款鳳凰殿〕

同校では、これらの教授陣以外にも学生たちがその制作にあたっていたことから、この「設計監督」というのは、絵画や彫刻に対してのものと思われるが、岡倉は『英語解説書』において「建物の主要なデザインは(略)久留正道が行い」(傍点筆者)という限定的な表現をしており、同校の教授陣が建築の設計に関係していたことも考えられる。但しその場合でも、彼らは形態概要の提示や設計の助言を行ったに止まり、実際の設計は建築の実務家である久留が行ったと考えられる。

重要なことは、久留がこの時東京美術学校の関係者であったのは偶然ではなく、久留が持っていた日本建築に

関する知識によると考えられることである。当時の岡倉は、同校に於いて日本美術の近代化を計っており、構想ではその中に建築も含まれていた⁴⁹⁾。これより、岡倉は日本建築に関する知識があり、その近代化を計れる人物を求めていたと考えられる。このことは、久留の後任者からも推測できる。それらの人物は伊東忠太や塚本靖、大沢三之助であり、岡倉が同校在職中に選ばれたこれらの人物はいずれも工科大学在学中より日本の古建築の調査研究を行っていた人物であった。

久留が岡倉の望みどおりの人材であったかは、疑問の余地があるが、少なくとも当時の「建築家」と呼ばれる人の中では、日本建築に詳しい唯一の人物であったと考えられる⁵⁰⁾。滝大吉は、鳳凰殿の工事監督のためシカゴへ赴く久留へ一文を贈っており、その中で以下のように述べている。

「久留工学士ハ舊工部大学校ニ在ルノ日ヨリ夙ニ和式建築法ニ意ヲ注ガレタルノ結果トシテ該式ニ關シ博学多識ナルハ余輩同窓者ノ常ニ讃賞措ク能ハザル處ナリシガ（略）」[滝大吉「久留工学士ニ呈スルノ書」『建築雑誌』（M25.9）]

多少の褒め言葉であろうが、これより、久留は学生時代から、日本建築に興味を抱いており、当時その知識が相当のものであったことがわかる。久留がそれを披露したものとしては、『建築雑誌』明治24年1月号に、「大日本古代建築沿革」と題した明治23年工学会臨時大会における講演の速記録がある。この中で、久留は有史以前の日本の住居などを、古事記、風土記や大鏡などの古代文学から歴史的考察を行おうとしている。

また久留自身が工学会において鳳凰殿について行った講演⁵¹⁾にも、以下のような発言がある。

「徳川氏ハ屏ノ内家ノ規矩ヲ用ヒテ、藤原氏足利氏ハ残ラズ東大寺派ノスミ金ヲ用キテイル」[久留正道「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付テ」『工学会誌』（M26.10）]

ここで言う「屏ノ内家」とは、恐らく『匠明』で知られる平内家を指し、「東大寺派」とは「東大寺工」⁵²⁾を指すものと考えられる。これより、当時の久留が日本建築について、史学的な知識だけではなく、意匠史的な知識も持っていたことを知ることができる。

しかし、この時点の久留は日本建築の設計監督の経験はなく、このことは、鳳凰殿の施工会社を決定する上で大きな要因を占めていた。久留は先の講演で、この事情について以下のように述べている。

「マダ日本ニハ信用スベキ会社ハ少ナイ、相談スベキ技術師ヲ持テ居ル会社ハ少ナイ」[久留前掲「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付テ」]

これより、当時の久留は、鳳凰殿の工事を監督するにあたり、日本建築に詳しい技術者を必要としていたことがわかる。その結果、施工は織田仙吉を擁していた日本土木会社に決定した。織田は、木子清敬の招きで上京し、皇居の造営にあたった後、明治23年に同社に入社して

おり⁵³⁾、日本建築の実務に明るい人物であったことは間違いない。これより、織田は、鳳凰殿主任技師に就任し、久留とともにシカゴでの工事に携わっている。

ところで、『東京芸術大学百年史』では、東京美術学校が鳳凰殿のような建物の室内装飾を行うことは、以前から計画されていたことであったとされている。

「本校がこの種（※）の室内装飾を担当することは開校前から計画されていたもので、フェノロサの発言（日本美術行政に関する提言『フェノロサ資料Ⅰ』六一頁）によればそれは本校の最大の努力目標の一つであったが、岡倉はコロブス博覧会という好機をとらえてその計画を実行したのであった。」（※一鳳凰殿、筆者註）[『東京芸術大学百年史、東京美術学校篇第一巻』（ぎょうせい、昭和62年）第3章第4節解説4 本邦家屋（「鳳凰殿」）]

ここでいう「フェノロサの発言」⁵⁴⁾とは、特に以下の部分を指していると考えられる。

「美術学校の最大の努力目標の一つは、装飾画の復興と発展でありましょう。ある公共建築の室内装飾が要求される時、当局は美術学校幹事にその最小の一室の装飾を一任しさえすれば、彼らは必ずこの方面における日本人の力量を証明できると確信しています」[「日本美術行政に関する提言」村形明子編・訳「アーネスト・F・フェノロサ資料第一巻」（ミュージアム出版、1982年）]

しかし、同校の教授陣だけでは、室内装飾は担当できても、外部を含めての鳳凰殿という建物の設計をなすことはかなわなかったであろう。それゆえ、久留という日本建築の知識を持った人物が同校の関係者であったことにより、岡倉は鳳凰殿の設計依頼を受けることが出来たと言えよう。

VI. まとめ

事務局は、米国が日本の最大の輸出国であったこと、シカゴ博がこれまでの万国博にない規模であったことなどから、同博参加に積極的な態度を見せ、その目的を、国威発揚と輸出拡大の二点に置いていた。

それらを実現してゆこうという姿勢は、前者については日本美術品の分類変更を主催者側に要求したことに、後者については評議員制度の採用などに現れていた。

この二つの目的を果たす為の材料として、鳳凰殿が用いられたのである。

鳳凰殿のような建物を建設する計画は先のパリ万国博の報告書で既に見られたことであったが、それを国威発揚の道具として用いようとした点は、『報告書』に強く見られることであり、九鬼隆一や岡倉天心の存在が大きいたと考えられる。

九鬼が事務局の実質的な責任者である副総裁に任命された理由は、特に前駐米公使であった経歴が評価されたと考えられる。しかしその結果、事務局で美術品などの出品方針に現れたものは、九鬼の米国での経験よりも、明治10年代から行っていた日本美術に対する活動であ

り、それからもたらされる国粋主義であった。

また、岡倉は帝国博物館理事として評議員に任命される以前から鳳凰殿の計画に携わっていたと考えられ、参加事業の進展にともない、評議員や鑑査官だけでなく、山高信雄や手島精一以外には農商務省の官吏だけであった事務官にまで任命されていることは、事務局内での岡倉の重要性が高かったことを物語っている。岡倉は、九鬼と同じく国粋主義的色彩の強い人物であり⁵⁵⁾、そのことは岡倉が東京美術学校で行っていた日本美術の近代化等の事業に現れている。日本館の建設が計画された以上、これらの人物が、中途半端な建物では満足せず、世界に誇るものの出来る本格的な日本建築を建設しようとしたと考えられる。その結果が、鳳凰殿の外観やその内部での美術品の展示に現れていた。

また、輸出拡大という目的に関しては、先のパリ万国博の報告書を執筆した柳谷謙太郎が目指したものであった。柳谷はシカゴ博でも事務官に任命されているが⁵⁶⁾、それより以前、九鬼が事務局の組織編成を行うに際して他の七名とともに⁵⁷⁾組織委員に指名されており、事務局に関する諸事の調査議定を行っている。これより、柳谷は事務局設立当初からその中枢部にあり、パリ万国博での経験を生かせる立場にいたと言えよう。さらに、衆議院予算委員会からも鳳凰殿が輸出拡大に貢献することを望まれていた。その結果が、鳳凰殿内部での美術工芸品の使用方法の教示という形に現れていた。

さらに、これらの目的を果たす日本館が鳳凰殿の形態に結実した点は、久留正道や岡倉の功績と言える。

久留は、三時代の建物の外観をまとめるために数々の工夫を行っている。ただ、そこに「新しい和風建築をつくってみせる」という積極的な発想が見られない点は、参考とすべき前例がない状態から鳳凰殿を作り出さねばならなかった、いわば開拓者としての限界を感じさせる。また、久留の日本建築に対する態度に帰すことも出来る。久留は、鳳凰殿以降明治37年のセントルイス万国博の日本館を除いて、日本建築の設計を行っておらず、建築史関係の論文も明治40年代まで見られない⁵⁸⁾。これらから、久留には日本建築を発展させていこうとする強い意欲が無かったのではないかと考えられる。

また、岡倉が帝国博物館理事および東京美術学校々長という立場から、鳳凰殿内部の展示に対して重要な役割を果たしていたであろうことはほぼ間違いない。そこには国威発揚だけでなく、輸出拡大という目的も求められていたにもかかわらず、それが商業主義を感じさせぬものになったのは、岡倉の功績とってよいであろう。

さらに、岡倉は鳳凰殿の内部だけでなく、東京美術学校がその設計を行った上、外観を含んだ全体に対しても大きな責任を負っていたはずであり、岡倉の美術史思想がその形態決定に重要な役割を果たしていたと考えられ

るが、これについては稿を改めて述べることにする。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、日本建築学会近畿支部近代建築部会の方々や東京工業大学百年記念館の稲葉信子女士から、数々の有益な御助言、貴重な御教示を頂きました。

ここに記して感謝の意を表します。

註

- 1) 工部大学校造家学科明治14年卒業(第三回生)
- 2) 本名岡倉寛三。天心は雅号であるが、現在ではこの名の方が知られており、本稿でもこれを用いる。
- 3) 永山定富『内外博覧会総説』(水明書院, 昭和8年) 第四編第一章海外博覧会参同沿革
- 4) 吉田光邦『改訂版万国博覧会—技術文明史的に—』(日本放送協会, 昭和60年)
- 5) 吉田光邦「総説」吉田光邦編『図説万国博覧会史 1851-1942』(思文閣出版, 1985年)
- 6) 浜口隆一、山口廣『万国博物語』(鹿島出版会, 昭和42年)。また、両氏は鳳凰殿建設の前提に、それをシカゴ市に寄贈する予定であったことを挙げられており、それゆえに本格的な建築物になったとされている。しかし、日本から出品する建築物が歴史的なものを表現することは、設計者久留の発言「久留正道「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付テ」『工学会誌』(M26.10)」より、計画当初の明治24年9月頃には決定していたことがわかる。また、シカゴ博での報告書(註8参照)の第四章第二十款鳳凰殿には以下のような記述があり、本格的な建築物を建設するからこそ、寄贈しようとしたと考える余地がある。「初メ我カ政府ノ鳳凰殿建築ノコトヲ企画スルヤ単ニ其構造裝飾ノ絶美ヲ表示スルノミヲ以テ足レリトセス尚ホ此施設ヲシテ永ク有効ナラシメンカ為メ特ニ之ヲシカゴ市ニ寄贈センコトヲ企画シ(略)」
- 7) 藤岡洋保、深谷康生「戦前に海外で開かれた国際博覧会の日本館の意匠について」『日本建築学会計画系論文報告集』(1991.1)。両氏は「日本館」のそれぞれを、一つの形式に当てはめたわけではなく、昭和12(1937)年のパリ万国博における坂倉準三設計による日本館は、「出品の陳列場としての機能が主体」と「接待室または事務所としての機能が主体」という二種の形式に重複している。しかし、この鳳凰殿の位置づけは、内部展示の重要性を無視することになりかねず、また永山氏や吉田氏の説に反するものと考えられる。
- 8) 『臨時博覧会事務局報告』(臨時博覧会事務局, 明治28年)
- 9) 『官報』明治23年4月15日号に、明治23年2月24日に北米合衆国代議員が1892年にシカゴで万国博を開催することを決したという記事を掲載した後、同年7月7日号に、1892年にコロンブス上陸記念祭、博覧会開場は翌93年になるとの記事を掲載している。
- 10) この経過は、『臨時博覧会事務局報告』(臨時博覧会事務局, 明治28年)(以下単に『報告書』とする)第一章第二款本邦参同略史によった。
- 11) 明治25年3月10日勅令第二十三号を以て事務局官制の改正追加を行った。これにより、鑑査官が任命され、さらに事務官も8名に増員している。また、定員2名で空

席のあった副総裁に、当時の駐米特命全権公使建野郷三を明治26年4月13日任命している。

- 12) 九鬼は明治11年のバリ万国博に審査官として参加したのを始め、明治14年の第二回内国勲業博覧会審査副長、同23年の第三回内国勲業博覧会審査官長などを歴任している。しかし、博覧会事業に関係した人物は九鬼以外にも存在するところから、九鬼が副総裁に任命された決定的要因は、明治17年から同20年まで駐米特命全権公使を務めていたという経歴であると考えられる。
 - 13) 当時の主要な国立学校の校長は評議員に任命されており、岡倉も東京美術学校々長という地位から任命されたと考えられる。
 - 14) 二人の関係は、明治15年当時文部少輔であった九鬼の学事視察に岡倉が同行し、近畿の古社寺を訪ねたことに始まり、これ以降二人の古社寺調査は数回に亘っている。
 - 15) 久留前掲「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付テ」より、明治24年9月頃より帝国博物館は、後に鳳凰殿となる建築物の調査を開始していたことがわかる。また、先の引用文にあるように、評議員が任命される以前の明治24年10月16日には第一回の評議員会が開かれている。
 - 16) 岡倉天心が行った日本美術の近代化は、明治期に行われた他分野の近代化と異なり、西洋化を目指したものではなく、あくまで日本美術の伝統に則りながらも、新しい日本画の創作を目指したものであった。
 - 17) 当時の岡倉の事績は、多くの先学によって研究されており、明治10年代では、書（道）を美術と認めない小山正太郎との論争や、日本美術の発展を期した団体「鑑画会」での活動をはじめとして、アーネスト・フェノロサとの繋がりが重視されている。しかし、岡倉の美術に対する思想が最も良く現れているのは、明治21年の東京美術学校の設立及びそこでの教育方針で、特に象徴的なものは、明治23年から3年間にわたって同校で行われた「日本美術史」の講義である。そこで岡倉は、創造のために歴史研究を行うとして、日本の美術史を学問的な材料としてではなく実践的に捉えており、作品の制作にあたって、日本美術の伝統に則りながらも、そこに停まることなく進歩することに努め、さらに時代精神を表すことを生徒たちに求めていた。
- また、岡倉の当時の国粹主義的な側面を表すものとして、明治19年から20年にかけてフェノロサとともに欧米に出張した時に、洋服で出発しながらも、現地では和服で通したことや、東京美術学校の制服に復古調の和服を採用したことなどがある。
- 18) 岡倉の各職務在任期間は、以下の通りである。
評議員：明治24年12月15日～同27年4月27日
鑑査官：明治25年5月19日～同26年12月19日
事務官：明治25年12月17日～同26年9月16日
 - 19) 【明治工業史建築篇】（工学会明治工業史発行所、昭和2年）「第一編第二章第二節皇居御造営事務局 第二. 同局工事実行上の組織」より
 - 20) 山高の各職務在任期間は、以下の通りである。
事務官：明治24年7月7日～同25年12月28日
鑑査官：明治25年5月19日～同26年12月19日
 - 21) 吉見俊哉「文明への眼、未開への眼」[INAX BOOK-LET Vol.10 No.1 万国博の日本館]（(株)INAX, 1990）
 - 22) 「博覧会評議員会」【大阪朝日新聞】（M24.10.25）より

- 23) 【東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第一巻】（ぎょうせい、昭和62年）第3章第4節 解説3「閣龍世界博覧会」には、当時の新聞から、明治24年12月21日の評議員会で岡倉がこの提案を行ったことを確認されている。
- 24) 配付日などの詳細は不明。但し、その要旨は【報告書】第三章第六款事務局ノ方針に収録されている。
- 25) 主催者側から、1892年3月2日付けで認可されている。
- 26) 明治25年12月5日衆議院本会議でシカゴ博に出品する日本建築（後の鳳凰殿）の建設目的が審議された時に末廣重恭議員が同じ内容の発言をしており、それから引用したものと思われる。この時には、鳳凰殿となる建物の概要がほぼ決定していたことから、末廣の発言が直接的にその建設の動機となったものではないことがわかる。
- 27) 吉用前掲「総説」【図説万国博覧会史】
- 28) ウィーン万国博では神社建築などを建設していた。しかし、この出品は主催者側から求められた結果であることを、前掲の藤岡・深谷両氏の研究「戦前に海外で開かれた国際博覧会の日本館の意匠について」は明らかにされている。またフィラデルフィア万国博では、旅籠風の本館と数奇屋風の販売所とを建設していた。
- 29) 「臨時博覧会事務局報告 第一回 参同ノ起因」【官報】（M26.6.3）より
- 30) 「我国古来建築ノ精美ヲ盡シ雅巧ヲ致シタルハ天平二始マリ藤原足利二氏ニ至リテ極レリ」【報告書】第四章第二十款鳳凰殿】
- 31) 藤岡・深谷前掲「戦前に海外で開かれた国際博覧会の日本館の意匠について」
- 32) この日本の陳列場は、シャン・ド・マルスに設けられたもので、トロカデロにも日本の植物出品場があった。
- 33) 明治6（1873）年のウィーン万国博に日本が出品した神社風建築や日本庭園をロンドンの業者が買収し、その移築や、さらにその業者が日本製品の輸入販売を希望したため、商品を日本から輸出する機関が必要となり、これらの事を行う商社を日本政府後援のもとに設立した。これが起立工商会社であるが、以降の海外の万国博においては、出品物の受託者としての参加事務を行い、さらに一般の貿易にも携わっていたが、業務の不振により明治24年に解散している。
- 34) 柳谷謙太郎の履歴に関しては、五十嵐栄吉【大正人名辞典】（東洋新報社、大正六年）に拠った。
- 35) 久留前掲「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付テ」より
- 36) 藤岡・深谷前掲「戦前に海外で開かれた国際博覧会の日本館の意匠について」
- 37) 「其形稍ヤ日本本洲ニ似テ樹木蕨蔭タル勝区ナリ」【報告書】第三章第六款事務局ノ方針】
- 38) 「本邦ヨリ出陣建築スヘキ鳳凰殿ハ本邦特殊ノ妙構神采ヲ發揮スヘキ工事ナレハ頗ル其建設ノ位置ヲ撰ハサルヘカラス而シテ該博覧会敷地ヲ挙ケテ此森島ヲ措テ適当ノ境ナシ」[同上]。但し、この敷地請求の時点では「本邦特殊ノ妙構神采ヲ發揮」する建物は、鳳凰殿ではなかったと考えられる。詳しくは、稿を改めて述べる予定であるが、事務局が当初予定していた建物は、シカゴ市に寄贈する予定であったことから、ウーディッド・アイランドに建設することを拒否され、その結果、鳳凰殿の形態をとることになったと考えられる。
- 39) 手島工業教育資金団【手島精一先生伝】（非売品、昭和4

- 年)より
- 40) 吉田前掲『改訂版万国博覧会—技術文明史的に—』
 - 41) 国会での小間提案は明治24年12月4日になされており、岡倉の評議員会での美術品の分類変更の提案は、これより後の同月24日に行われている。岡倉の提案は先に述べたように日本美術品の名誉の問題であった。しかしこの間に、岡倉もしくは事務局の誰かが美術工芸品の使用方法の教示を考えついたことにより、岡倉は日本から出品する美術品の特質を表現し、それらが単に工芸品でないことを表明できると考え、その結果、美術品の分類変更を提案したと考える事もできる。
 - 42) 前掲『東京芸術大学百年史、東京美術学校篇第一巻』第一章第二節中の「美術局設立運動」によれば、明治17年10月21日付けの岡倉から龍池会々頭佐野常民宛の手紙や、明治19年3月に岡倉が河瀬秀治と謀って、河瀬が幹事長をしていた貿易協会が当時の総理大臣伊藤博文に提出した「美術局設置の建言書」、さらに後で述べるフェノロサの「日本美術行政に関する提言」(註54参照)など、いずれも日本からの美術品の輸出拡大を指摘していた。
 - 43) Okakura Kakuzo 『THE HŌ-Ō-DEN (Phoenix Hall) An Illustrated Description of the Buildings Erected by the Japanese Government at the World's Columbian Exposition, Jackson Park, Chicago.』(K. Ogawa, 1893)
 - 44) “Tokyo Art Academy”とは東京美術学校を指すと考えられるが、同書において、自らを“Directon of the Tokyo Fine Art School”としており、混乱が見られる。
 - 45) 本訳は、『岡倉天心全集2』(平凡社、1980年)所収の「鳳凰殿」(訳:金子重隆)を参考としたが、重要と考えられる点は英文の表現に従うこととした。
 - 46) 嘱託期間:明治24年6月~同26年2月 前掲『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第一巻』より
 - 47) 久留は、明治23年の第三回内国勸業博覧会の折りに、文部省から「出品取調委員」を命じられており、そこでの活動が注目されるが、『第三回内国勸業博覧会事務報告』(第三回内国勸業博覧会事務局、明治24年)によれば、久留は列品館などの計画には関与していない。この時文部省は、「出品部類目録」によれば第五部教育及学芸の部門に学校建築の「図按」や「図学模型及図引器械」を出品しており、久留はそれに関係したと考えられる。これらから、同博覧会での久留の活動は、シカゴ博での鳳凰殿の設計依頼に直接の関係はないと考えられる。
 - 48) 「徳川時代」建物の絵画、彫刻は、それぞれ橋本雅邦、高村光雲、「足利時代」建物の絵画は川端玉章、「藤原時代」建物の絵画は巨勢小石が担当していた。
 - 49) 明治21年に制定された「東京美術学校規則」によれば、同校の専攻科目は絵画、彫刻、建築、図案の四科が予定されていたが、岡倉が同校々長を務めていた期間に、建築科は設けられずに終わった。
 - 50) 当時、伝統的な日本建築について学問的な知識や研究的な態度を有していたのは、工科大学造家学科の在校生や卒業生に期待するばかりは無く、木子清敬などの工匠は専門的な知識があるにしても、それを岡倉の期待に沿うように発展させることは難しかったと考えられる。しかし、本格的に日本建築の研究を開始する伊東忠太の造家学科卒業は明治25年であって、この時点においてはまだ期待できない状況であったと考えられる。
 - 51) 『工学会誌』(M26.10)には、この講演の日時が記載されていないが、これは、明治25年7月15日に工学会通常会に於いて行われた久留の演説「シカゴ博覧会ニテ建築ノ日本家屋」と考えられ、同誌に掲載される時点で、題名が変更されたものと思われる。
 - 52) 田辺 泰、渡辺保忠:『2 中世 2.6 建築生産』【新訂建築学体系4-I 日本建築史】(彰国社、昭和43年)に、寺工組織として東大寺のものを挙げられており、久留はこの組織の木割りをういたと考えられる。
 - 53) 【大成建設社史】(社史発刊準備委員会、昭和38年)より
 - 54) 同書の村形明子女史の解題によると、この提言は明治19年に宮内省で行われた「より有効な美術館および日本美術工芸発展のための計画」に関する会議の草稿と考えられており、起草の時期は明治19年2月から同年3月24日までの間に絞られている。
 - 55) 岡倉の国粹主義は、国際的な視野を感じさせるもので、伝統を重視したという点では保守的な傾向が無いとは言えないまでも、岡倉は現状に止まることの危険性を常に指摘していた。
 - 56) 在任期間:明治24年7月7日~同27年12月28日
 - 57) 商工局長齊藤修一郎、鉱山局長和田維四郎、特許局長奥田義人、秘書官原敬、農商務技師平賀義美、同志賀泰山、同澤野 淳。
 - 58) 明治40年代には以下のような久留の論文が見られる。
「寛政御造営記」【建築世界】(M42.9~M43.3)
「矢倉建築法及其割出」【建築世界】(M43.6~M43.11)

(1991年5月10日原稿受理, 1991年9月17日採用決定)